

# Hardy の小説における人間像

—mortals から immortals へ—

赤 木 雅 吾

## I

*The Eighteen Nineties* の著者、Holbrook Jackson が19世紀末の最大の問題は“*How to live*”即ち「人生如何に生きるべきか」であり、又この時代の人々の人生における最大の目的は“*to live passionately*”であったと述べている。この事は同時に Hardy の小説に登場する人物達にとっても最大の課題であり、又最大の目的でもあった。Hardy の小説において、最も強く我々読者の心を惹きつけて止まないものは、言う迄もなく、Hardy の描くあの生き生きと躍動している人間像であり、その人間像に見られる、あの強烈な生き方であり、あの飽くなき生命力である。その異常と言える程力強く、情熱的である生命力はギリシャ悲劇の英雄達にもたとえられる程威厳に満ちた、不屈の生命力なのである。しかし、Hardy の人物達の生きた人生の大きさ、偉大さは、決して、その客観的長さによって計られるものではなく、あく迄彼等の主観的経験、即ち内面的精神的生活を通して判断されるべきものなのである。従って、ここでは Tess, Eustacia を中心とした Hardy の登場人物達の精神的発展過程に焦点を当て乍ら、Hardy の人間像を究明する事がこの小論の目的である。

Hardy の小説に登場する人間は、およそ二つのタイプに分けて考えられる。即ち、その第一のタイプは成る程存在はしていても、一個の人間としての意志 (will) をもたないで、常に何かに依存し、自分以外の他の力

によって動かされている受動的な、一種の機械と化した人間である。第二のタイプは、言うまでもなく、自分の強い意志を常に表わし、自己の意志で行動しようとする積極的、動的人間である。

Hardy 自身は彼の 1889 年 2 月 13 日の日記の中で次の様な人間分類をしている。

“February 13. You may regard a throng of people as containing a certain small minority who have sensitive souls; these, and the aspects of these, being what is worth observing. So you divide them into the mentally unquicken<sup>3</sup>ed, mechanical, soulless; and the living, throbbing, suffering vital. In other words, into souls and machines, ether and clay . . . .

この Hardy 自身の ‘souls’ と ‘machines’, 「魂ある者」と「機械」という人間分類は、次の引用文に見られる *Desperate Remedies* (1871) の Manston の言葉によって更に具体的に表わされている。

‘I am now about to enter on my normal condition. For people are almost always in their graves. When we survey the long race of men, it is strange and still more strange to find that they are mainly dead men, who have scarcely ever been otherwise.’<sup>4</sup>

これは Manston が死を直前にして書き残した遺書の最後の条りであるが、「自分は今正に normal な状態に入ろうとしている、というのは人々は殆んどその normal な状態、即ち死の状態に入っているからである」と言う、この Manston の言葉は非常に興味ある人間分類を表わしている。というのは、ここで Manston がこれから入ろうとする normal condition とは言うまでもなく、死の状態であるし、それに対して、Manston がこれまで送ってきた状態は normal に対する abnormal condition 即ち生の状態、life の状態であったと考えられるからである。この normal, abnormal という言葉の意味は主観、客観の立場によって大いに異ってくる。こ

ここで、Manston の言う normal とはあくまで主観的なものであるし、これから筆者の用いる normal, abnormal とは、Hardy の小説における社会、世間の立場から考える客観的の意味である。しかし、その表面上は如何にも normal に見える社会が真に normal でありうるかどうか、又如何にもその社会の normal さに比べて Hardy の主人公達は誠に異常な行動、異常な生き方をしているが果して実際に abnormal と言えるか、どうかでここで究明すべき大きな問題である。

確にこの過去の Manston 同様、Hardy の描く他の hero, heroine 達も決して normal condition に妥協出来ない存在、現状に満足出来ない存在である。The Outsider の著者である、Colin Wilson が「英雄とは現状を受け入れる事の出来ない人間である。彼にとって現在の生き方に妥協しない事が、とりもなおさず自由という観念である様なそう云う人間である<sup>5</sup>」と述べているが、その意味では Hardy の主人公達は正しく「英雄」と呼ばれるにふさわしい人間達である。殊に The Return of the Native (1878) の Eustacia はその典型的人物として描かれている。彼女は「とかく世間の逆にと出たがる本能<sup>6</sup>」をもった、その意味で誠に heroic な、世間の目から見れば、誠に abnormal な存在である。又、Alec によって身をけがされ、失意のどん底に突き落されて帰って来た Tess に対して、母親が「そこまで、できとったら、どんな女だって嫁になれたのに！お前は例外だ！」と言って Tess を詰めるが、「どんな女だって嫁になれたのに、わたしは例外！ そうかも知れないわ<sup>7</sup>」と答える Tess、ここに、この母娘の住む世界の相違が感じられるのである。身をけがされた事を結婚して貰える当然の理由として考える母親からすれば、確に Tess は「例外」であり、世間の一般の女性と違った、その意味で abnormal な女性なのである。従ってこの abnormal な Tess に対して、母親は正しく、normal な社会の代表的人物なのである。常に運勢占いの本を後生大事にし、すべてを「自然の成り行きで、神様の思召しだ<sup>8</sup>」として、迷信や運命に依存し

切って、その命ずるがままに生きている人間である。この様な人間達の特徴は、Hardy の言葉通り、その受動性、passivity なのであって、およそ、彼等自身の motion、動きは持ち合せていないのである。つまり、この様な人間の生き方こそ、前述の如く、mechanical であり、soulless であって、その意味では、正に死の状態、精神的死を意味したものであると言えよう。

*The Return of the Native* の第三章で、たき火を囲んで話し合っている農民達の会話に、迷信を恐れ、迷信を信ずる事によって、人間性を失っている姿が見事に表わされている。そこでは、Christian という男が満月の日に生れなかったという事から、他の農民達の Cattle, Fairway 等が “No moon, no man” (月のない夜には男児は生れない<sup>10</sup>) という迷信を引っ張り出して、三日月の時に生れた男の子は碌なものにならない、結婚相手もない様な不仕合せな目にあうと話すのである。これを聞いていた Christian は自分が悪い星の下に生れた事を信じてしまい、その恐怖に戦くのである。更に興味ある事は、次の引用の如く、Christian が絶望的になって、「骸骨みたいな人間で、誰様の役にも立たねえって言われるのも、結局はそのせいだと俺あ思うよ」と話している事である。

‘’Tis said I be only the rames of a man, and no good for my race at all; and I suppose that’s the cause o’<sup>11</sup>t.’

この Christian の言葉通り、この様な迷信を信じ、迷信に操られる人間達は紛れもなく、“the rames of a man” であり、生ける屍なのである。

更に暗闇の Egdon Heath で農民達が燃やしている、この地方特有の風習である、たき火を、人間に起る本能的抵抗行為であり、人間に悲惨をもたらす至上命令へのプロメシウスの反逆の名残りであると、Hardy は説明している。この Hardy の説明はそのたき火を燃やしている農民達への誠に見事な irony となっている。というのは、その農民達は、人類に火を与えたため、世界の主神、ゼウスの怒りにふれ、その罰として縛られたプロメシウスが最後まで、その縛めの運命にも屈せず、反抗し続けるのとは

全く違って、迷信を恐れ、運命を恐れ、小心翼翼として生きている人間達であり、およそ、プロメシウスの反逆とは縁遠い存在であると言えるからである。

この無気力なプロメシウス達のたき火に反して、この作品の heroine, Eustacia のかがり火は、正しく、プロメシウスの反逆の火であり、生の証しとしての焰となっている。その一際目立つ焰が星に対する月の如く、農民達のおとろえ切った火と対照的に異常な光を放っている事は Eustacia 自身の内面的姿を表わした象徴的な光りとも言えるのである。

Save one; and this was the nearest of any, the moon of the whole shining through. It lay in a direction precisely opposite to that of the little window in the vale below. Its nearness was such that, notwithstanding its actual smallness, its glow infinitely transcended theirs.<sup>13</sup>

更にこの事は、Eustacia の魂の色が 'flame-like' 紅蓮の炎であったと云う描写によって、一層強められている。農民達が運命を恐れ、迷信を恐れ、Egdon Heath を 'bad place' として怯え乍ら生きているのと対照的に、Eustacia は運命の化身とも考えられる Egdon Heath, 昔シーザーすら逃げ出そうとしたこの不吉な、陰うつな Egdon Heath を恐れるというよりは、憎み、敢然と挑戦しているのである。<sup>14</sup> 云わば、縛られたプロメシウスの如く、運命と云う縛めを受け乍らも、自己の生の続く限り、人間としての自由意志と行動によって、その縛めに反抗するのである。

## II

この様な、反逆的、abnormal な、いわゆる生の世界に住む Hardy のプロメシウス達のこの世における唯一のオアシスであり、彼等の原動力となっているものは、love 即ち男女の愛である。その愛こそ、彼等がこの世に求めるすべてであり、人生の目的なのである。しかし、彼等の求める

愛は決して、世間一般の、通俗的な愛ではなく、誠に abnormal な passionate love であり、「気も狂わんばかりに愛されたい」という異常な程までも情熱的な激しい愛である。

To be loved to madness — such was her great desire. Love was to her the one cordial which could drive away the eating loneliness of her days. And she seemed to long for the abstraction called passionate love more than for any particular lover.<sup>15</sup>

更に言い換えると、通俗的な男女の間に見られる愛が唯単に財産、地位、或いはその男女を取り巻く社会、両親等という、当人以外の他の意志の介在した、いわゆる不純な愛、因襲的愛であるのに対して、この様な abnormal な愛は男女の自由意志に基づいた崇高なまでも美しい、純粋な愛なのである。従って、Tess にしろ、Bathsheba にしろ、或いは Oak にしても、Hardy の hero, heroine 達のすべてが、この様な愛を求め、その愛に生きていると言える。つまり、これらの人間達にとって love 即ち life, 生命なのである。Tess にとって、Angel への愛こそ、「テスの全身全霊の息づかいであり生命である」と同じ様に、Eustacia がナポレオン、William 征服王等という英雄達に時折り祈る「どこからか大きな愛をお贈り下さいまし、さもないと、あたしは死んでしまいます」と云う祈りの言葉にも、「愛を失う事は死を意味する」という激しい愛への欲求が示されている。<sup>16</sup>この事は更に Tess が Angel の愛を失い、自分の意志に反した、いわゆる愛の存在しない Alec との同居生活によって、生ある意志から切り離された屍と化していた事からも説明出来るであろうし、又 Angel がブラジルから帰って来た事を知ると、Alec を殺してまでも、Angel に会おうとする、この異常な激しさ、強烈さこそ、Tess にひそむ Angel への愛の強さ、生への異常なまでの欲求を示したもののなのである。<sup>17</sup>

この様な Hardy の主人公達に見られる、いわゆる世間一般の normal な生活、normal な愛への妥協を、人間としての死に等しいものとして拒

み続け、あく迄人間の自由意志による生活、自由意志による愛を全うしようとする、強固な意志と努力、勇気を支えているものは人間としての名誉、誇りなのである。Angel が Tess を見て感じた様に、Tess は Tess なる一個の人間としての貴重な生命をもって生きているのであり、王侯、貴族に劣らぬ大いさをもっているのである。この貴重な生命をもった、一個の人間としての誇りが Tess に Alec からの求愛をきっぱりと拒絶させているのである。即ち、Tess が自分の意志を偽って、Alec に妥協してしまえば、彼女にとって、誠に安全な、安易な道である事は知り乍ら、その様な嘘を云えないのは人間としての名誉と誇りが Tess の中に大きな位置を占めているからである。

‘I have said so, often. It is true. I have never really and truly loved you, and I think I never can.’ She added mournfully, ‘Perhaps, of all things, a lie on this thing would do the most good to me now; but I have honour enough left, little as ’tis, not to tell that lie. If I did love you I may have the best o’ causes for letting you know it. But I don’t.’<sup>19</sup>

又 Eustacia が Clym との愛に破れて、Egdon Heath から出ようとする夜、途中で、旅の費用を全く持ち合せていない事に気がつく、その時でさえ、金銭上の援助を Wildevve に乞い、いわゆる情婦として家出する事は Eustacia の誇りが許さないものであり、又その誇りを棄てた屈辱に耐える事が彼女には出来ないものである。

To ask Wildevve for pecuniary aid without allowing him to accompany her was impossible to a woman with the shadow of pride left in her; to fly as his mistress — and she knew that he loved her — was the nature of humiliation.<sup>20</sup>

人間としての誇りを棄てる事は、いわゆる、normal な世界への妥協であり、一個の人間としての生命を他に売り渡す事であり、自我の滅却を意

味するものなのである。 *The Mayor of Casterbridge* (1885) の Henchard が Farfrae との商売上の争いに敗れ、すべての物を失い、乞食同然になり乍らも、元々、自分の屋敷であった Farfrae の家に住む様、Farfrae から、すすめられても、頑として受けつけないのは例え財産は売り渡したとしても、人間の証しとしての魂まで売り渡せないという pride が Henchard に残っているからである。又、Henchard にとってこの世に残された唯一の支えであり、愛の対象でもある Elizabeth の下から出て行こうと決心させるものは、やはり Henchard の pride なのである。Elizabeth が自分の元使用人であった Farfrae と結婚した後、その結婚に便乗して自己をすべて棄て去った、いわゆる 'fangless lion' (爪なきライオン) として同居する事は Henchard にとって耐えられない屈辱なのである。従って彼は人間としての pride を守るために、如何に落ちぶれようと自分に与えられた生命をあく迄全うするために Elizabeth の下を去って行くのである。

He proceeded to draw a picture of the alternative — himself living like a fangless lion about the back rooms of a house in which his stepdaughter was mistress; an offensive old man tenderly smiled on by Elizabeth, and goodnatureedly tolerated by her husband. It was terrible to his pride to think of descending so low; and yet, for the girl's sake he might put up with anything; even from Farfrae; even snubbings and masterful tongue-scourgings. The priviledge of being in the house she occupied would almost outweigh the personal  
<sup>21</sup>humiliation.

### III

しかし同時に、この様な人間としての誇りがある故に、Hardy の主人公達はすべて常に何かの壁にぶつかり、苦しまねばならないのである。それは、いわゆる人間の弱さ、みにくさからくる壁であって、自然或いは社



会といった外的な、具体的な壁ではなく、主人公達の心にひそむ壁である。言い換えれば主人公達の心にひそむ、世間一般の normal な life, 安易な道を選ぼうとする、弱い、みにくい自我という壁なのである。即ち、彼等の苦しみ、悲しみはこの自分の中に巣食っている弱い、みにくい自我、人間的弱さ、欠点との対決を通して起きているのである。

Tess は Alec の所から両親のいる Marlott の村へ帰り、日中は人目を恐れ、周囲のものすべてを恐れ、日が暮れると森へさまよいついては、自然を恐れ、すべてのものが自分を責めさいなむ存在として見つめ、悲しみ、苦しみそして遂には死をも覚悟するのである。しかし、その様な苦しみを経て、彼女を苦しめ、彼女を怯やかしていたものは、彼女の外にある存在、即ち周囲の環境ではなくて、彼女の心に巣食っている「うんかの如き小鬼の大群」であり、彼女の幻想の勘違いした創造物であった事に気付くのである。

But this encompassment of her own characterization, based on shreds of convention, peopled by phantoms and voices antipathetic to her, was a sorry and mistaken creation of Tess's fancy — a cloud of moral hobgoblins by which she was terrified without reason.<sup>22</sup>

元々、世界は一つの心理現象に過ぎず、Tess が恐れ戦いていた社会、或いは自然は Tess の外部に存在しているのではなくて、Tess の内部、心が創り上げ、心に存在しているものなのである。従って Tess 以外の人間にとっても、Tess は一個の存在ではなく、経験でもなく、唯単にかすめゆく、束の間の想いに過ぎない<sup>23</sup>のである。この様に自分を客観視し、突き離して見る事によって、Tess は悟りの境地、救いを見出すのである。又、Tess が再起を目指して Talbothays へやって来たあくる朝、乳しぼり仲間達に「自分の魂が生きている体から抜け出す事がある<sup>24</sup>」と話している、この Tess の言葉は Tess の魂が肉体から抜け出して、Tess 自身の姿を第三者として客観的に見つめる能力が Tess に備わっている事を示し

ている。

この点に関しても、いわゆる normal な世界に住む農民達とこの abnormal な世界の人間達との間に大きな相違が見られるのである。と言うのは、この農民達の恐怖心は常に自分の外部の存在に向けられており、それが時には悪をもたらすものとしての人間であり、時には人間を滅亡に導くものとしての自然であり、或いは悪の前兆としての鶏の鳴き声なのである。しかも彼等には、その様な恐怖の存在が常に外部に存在していると信じ、それが彼等自身の創り上げた妄想であって、彼等の恐るべき存在は彼等の内部、心の中にこそ存在している事には気付かないのである。だからこそ、「Tess の魂が肉体から抜け出す」という話を聞いても、唯驚くばかりで、全く信じる事が出来ないのである。何故なら、彼等にはその様な内省的な能力、或いは自己を客観視する能力が全くないからである。それだけに、農民達には常に恐怖心はあっても、悲しみ、苦しみは存在しないし、又その救いもないと言えるのである。

これに反して、Hardy の主人公達は内省、いわゆる、心の中での対決、かっとうという苦しい経験を通して、その弱い、みにくい自我を自分の心から抹殺しているのである。その意味で、Hardy の主人公達は殆んどと言ってよい程、一度は死ぬのである、つまり精神的な死を経験しているのである。その事は死に近い程の苦しみの経験を表わしていると同時に、その主人公達の心に巢食っている弱い自我の死を意味したものであり、新しい自我の誕生を意味したものである。

*The Mayor of Casterbridge* の Henchard は穀物相場の暴落で大きな傷手を受けるがその失敗を決して自分の故とはせず、誰か他の者がロウ人形を作って、火あぶりにしているという迷信を信じかける。その事に示されている様に、この頃の Henchard は自分の外部へ目を向けても、自分自身の内部を見つめる事の出来ない、いわゆる normal な世界に属する人間なのである。

The movements of his mind seemed to tend to the thought that some power was working against him.

‘I wonder,’ he asked himself with eerie misgiving; ‘I wonder if it can be that somebody has been roasting a waxen image of me, or stirring an unholy brew to confound me! I don’t believe in such power; and yet — what if they should ha’ been doing it!’ Even he could not admit that the perpetrator, if any, might be Farfrae. These isolated hours of superstition came to Henchard in time of moody depression, when all his practical largeness of view had oozed out of him.<sup>25</sup>

しかし、その後の決定的打撃によって、落ちるところまで落ち、何度か死を覚悟する程の苦しみを経て、Henchard は次第に自分自身の内部へ目を向け始めるのである。その様な或る日、彼が以前自殺しようとした川の中に自分の屍を見るのである。それは実際は唯単に Casterbridge の町の連中が今は市長夫人である Lucetta に対するいたずらを目的として作った Henchard の人形に過ぎなかったのであるが、その事件は Henchard にとって死の体験をしたと同じ程の意味をもっているのである。と言うのは、Henchard がそれを契機として、‘resuscitate’<sup>26</sup>つまり蘇生するのである。云わば、過去の Henchard は死に、新しい第二の Henchard として再出発するのである。

又、*Far From the Madding Crowd* (1874) の heroine, Bathsheba は Troy との恋に破れて、初めて現実の自分を冷静に見つめる機会を得るが、その過去の我が身を悲しみの中に見つめる Bathsheba は、いわば ‘a dead person’ と化しているのである。

She looked back upon that past over a great gulf, as if she were now a dead person, having the faculty of meditation still left in her, by means of which, like the mouldering gentlefolk of the poet’s

story, she would sit and ponder what a gift life used to be.<sup>27</sup>  
 更に数カ月経って、Oak に「あの頃の自分は死んでいた」と Bathsheba<sup>28</sup>  
 が話している。即ち、この死を通して、Bathsheba の心に大きな変化が起  
 きているのである、つまり第二の Bathsheba が誕生しているのである。

*The Well-Beloved* (1892) の場合も、唯、幻の女性のみ追い求め、しか  
 も表面の美にのみ捉らわれていた主人公 Pierston が生死をさまよう熱病  
 に冒されて初めて、自分自身の大きな心境の変化に気が付き、自分が最早、  
 過去の自分ではない事を悟るのである。

Pierston was conscious of a singular change in himself, which had  
 been revealed by this slight discourse. He was no longer the same  
 man that he had hitherto been. The malignant fever, or his ex-  
 periences, or both, had taken away something from him, and put  
 something else in its place.<sup>29</sup>

この事は幻想のみ追い求めていた過去の Pierston の死と現実を見つめよ  
 うとする新しい Pierston の誕生を意味している。

この様に、いわゆる abnormal な人生を歩む Hardy の hero, heroine  
 達は自己の精神的な死、或いは他人の死と直面する事によって、常に再生  
 し、新たな人生を見出しているのである。

#### IV

*Late Lyrics and Earlier* (1922) の Apology の中で、「人生の the  
 Worst, つまり最悪の状態を熟視する事が精神的肉体的進歩への道である」<sup>30</sup>  
 と Hardy は述べている。その「人生の最悪の状態を熟視する事」とは、  
 ここで言う死の体験という、人生における最も苦しい状態の体験であり、  
 現実の把握を意味したものである。又、進歩への道とはその死の体験を通  
 しての人間的变化、成長を意味したものである。いわば、死に表わされて  
 いる人間的弱さを知る事によって、Hardy の主人公達は人間的強さを得

ているのである。

その意味で、Hardy の主人公達はこのような死の体験という精神的苦闘を通して、宇宙における人間の存在価値、或いは人生のもつ意義を見出し、ているのである。そこに彼等の人間的成長、進歩が認められると言えよう。例えば、妻子をまるで品物のごとく売り飛ばした頃の、利己的な、非情な Henchard とそれから二十五年後に同じ場所に立ち帰り、過去を振り返って、「自分が人の心情を犠牲にしてしまったものは自分が今迄得たものに劣らない丈の価値があったのだ」としみじみ感じる Henchard との間には人間としての大きな相違が見られる。成る程、外面的には過去の Henchard も二十五年後の Henchard も無一物である事には変りはないのであるが、狭量な利己心を棄て去り、過去の忌むしい自分の姿をふり返り、現在の自分の姿を熟視する事によって、人間の心の尊さ、人間の価値を悟った Henchard は過去の Henchard とは比べものにならない人間としての精神的成長、進歩を遂げているのである。

He experienced not only the bitterness of a man who finds, in looking back upon an ambitious course, that what he has sacrificed in sentiment was worth as much as what he has gained in substance; but the superadded bitterness of seeing his very recantation nullified.<sup>31</sup>

又、この Henchard と同じ様に、因襲的な狭い利己心から Tess を振り棄てた Angel が「ある性格の美醜はその人の業績のみにあるのではなく、その目的と動機にあるのだ」という悟りの境地に達し、更にブラジルでの旅の道連れの男を通して、宇宙という大きな立場から人間という存在を見つめた場合、テスの過去の過失が如何に取るに足らないものであるか、又自分の狭量さこそ、如何に恥すべきものであるかを悟るのである。

The stranger had sojourned in many more lands and among many more people than Angel; to his cosmopolitan mind such deviation from the social norm, so immense to domesticity, were no more than

are the irregularities of vale and mountain-chain to the whole terrestrial curve. He viewed the matter in quite a different light from Angel; thought that what Tess had been was of no importance beside what she would be, and plainly told Clare that he was wrong in coming away from her.<sup>33</sup>

又、Clym の愛を失い、悲劇のどん底に突き落された時の Eustacia にも、自分自身を抜け出し、全く別の、私心を去った傍観者として自己を眺め、自分が天にとって、何んと言う玩弄物なのか、と考える余裕が見られるのである。

But her state was so hopeless that she could play with it. To have lost is less disturbing than to wonder if we may possibly have won: and Eustacia could now, like other people at such a stage, taking a standing-point outside herself, observe herself as a disinterested spectator, and think what a sport for Heaven this woman Eustacia was.<sup>34</sup>

この Eustacia の言葉にも表わされている様に、Hardy の主人公達の到達する究極的境地は自己を宇宙における一存在として客観視すると言う事によって人間に働きかける目に見えない力、運命を認識すると言う悟りの境地なのである。Tess の最後の章、Fulfilment で、Tess が「来るべきものは来るのだ」<sup>35</sup>と言う、その言葉には、運命という目に見えない力の認識から起る、どんな不安、恐怖、苦悩も超越した平和そのものの人間の姿が示されている。

唯、ここで問題となる事は、この様な Hardy の主人公達に見られる運命の認識は、Tess の母親に代表される、normal な人間達の運命に対する態度とは根本的に違っている事である。即ち、これら normal な人間達の場合は迷信、或いは占いの書物から与えられた運命の盲信、盲従であって、おおよそ、人間としての意志、努力による経験を通しての認識ではないので

ある。それに反して、Hardy の主人公達は自己の意志により、自分の力で、自分の苦しい体験を通して、つまり、自分で生きて見て悟った運命の力なのである。従って、normal な人間達の運命の認識は運命への屈服、いわゆる人間の弱さを意味したものであり、Hardy の主人公達の認識は、人間の宿命、人間の弱さを知る事によって彼等の人間的強さとなっているのである。いわば、宇宙における人間の位置、人間の可能性、人間の価値の認識であり、宇宙の真理の認識と云う、いわゆる運命を超越した境地を見出しているのである。

その意味で、Hardy 批評家の常に問題とする、the President of the Immortals<sup>36</sup>、或いは colossal Prince of the World<sup>37</sup> と言う言葉は、人間に対する運命の強さを強調する意味ではなく、その様な運命の力を認識し、更にその運命を超越した境地に達し得ると言う人間の可能性、人間の生命力の強さ、偉大さを示した言葉と考えられるのである。というのは、Hardy の主人公達には、あの Eustacia の運命への最後の凄じい不屈の反逆と、その死に見られる様に、又、Tess, Henchard の死を前にしての、生死を超越した安らかな態度に見られる様に、そこには敗北者としての屈辱感ではなく、人生の苦闘を最後まで闘い抜いた闘士としての、又勝利者としての誇りと威厳が示されているからである。

従って、“‘Justice’ was done”（正しき裁きが執行された）という事は、いわゆる Tess を取り囲む mortal であり、normal である人間達による裁き、即ちこの世の裁き、地上の裁きを意味したものである。言い換えれば、Tess の肉体への裁き、即ち肉体的死を意味する処刑なのであるが、その様な凡そ最初から最後まで死人に等しい normal な人間達が果して Tess に正しい裁きを与えられるのか、どうかという事から考えれば、この言葉は誠に ironic な意味をもっている。

そして、この言葉の後に続く、「不滅なる神々の司長はテスを相手の彼のたわむれを終った」と言う言葉は、不滅の神が Tess に対して拘束力を

失った事を示していると考えられる。というのは、Tess が Stonehenge の生けにえの石に横たわり乍ら、「死んだ後も又会えるでしょうか」‘Tell me now, Angel, do you think we shall meet again after we are dead? I want to know.’<sup>38</sup> 即ち人間の魂は不滅なのかどうかと、Angel に尋ねるのであるが、Angel はその間に答えられないのである。その Angel の答えられなかった解答こそ、この「不滅なる神々の司長」云々と言う言葉に暗示されていると考えられるのである。言い換えれば、不滅なる神々の司長は遂にテスに対する運命の力を失ってしまったのである。何故なら Tess は運命の神の手の届かぬ Immortal の世界に入っているからである。いわば、そのために‘the Immortals’と言う言葉が用いられているのであり、更に Tess の魂の不滅を強調するために、Tess の妹、Liza-Lu が「テスを霊化した様な生き写し」‘a spiritualized image of Tess’<sup>39</sup> として登場していると考えられるのである。

この様な Hardy の描く人間像には、縛られたプロメシウスの如き、ギリシャ悲劇の英雄神達に見られる、自己の運命を知っているが故に勝利者であり、不滅であると言う強さ、威厳が感じられるのである。又、彼等が苦しい体験を通して歩んだ人生記録は、肉体は例え、滅びようとも、その魂は永遠に不滅であるという、人間の生命力の無限の可能性を示した人間の魂の記録なのである。

——この小論は日本ハーディ協会第九回大会（1966年11月13日）於京都大学）で発表したものに加筆、修正を加えたものである。——

#### 注

1. Cf. H. Jackson, *The Eighteen Nineties* (London: Grant Richards, 1913), pp. 30-31.
2. T. Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* (London: Macmillan, 1950), p. 200. Many besides Angel have learnt that the magnitude of lives is not as to their external displacements, but as to their subjective experiences. The impressionable peasant leads a larger, fuller, more dramatic life than the



pachydermatous King.

3. Hardy, Mrs. Florence Emily, *The Early Life of T. Hardy* (1840-1891) (London: Macmillan, 1928), p. 243.
4. T. Hardy, *Desperate Remedies* (London: Macmillan, 1924), p. 457.
5. C. Wilson, *The Stature of Man* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1959), p. 75.

The idea of a hero is of a man who needs to *expand*, who needs wider fields for his activities. He is the man who cannot accept the status quo. He is the man for whom the idea of freedom is a contradiction of his present way of life.

6. T. Hardy, *The Return of the Native* (London: Macmillan, 1926), p. 82. Thus she was a girl of some forwardness of mind, indeed, weighed in relation to her situation among the very rereward of thinkers, very original. Her instincts towards social nonconformity were at the root of this.
7. T. Hardy, *op. cit.*, p. 105.

‘And yet th’st not got him to marry ’ee!’ reiterated her mother. ‘Any woman would have done it but you, after that!’ ‘Perhaps any woman would except me.’

8. *Ibid.*, p. 106.
 

‘Well, we must make the best of it, I suppose. ’Tis nater, after all, and what do please God!’
9. Evelyn Hardy (ed.), *T. Hardy’s Notebooks* (London: Hogarth Press, 1955), p. 30.

We are continually associating our ideas of a modern humanity with bustling movement, struggle and progress. But a more imposing feature of the human mass is its passivity. Poets write of ‘a motion toiling through the gloom,’ you examine: it is not there.

10. T. Hardy, *op. cit.*, p. 29.
11. *Ibid.*, p. 30.
12. *Ibid.*, p. 19.

Moreover to light a fire is the instinctive and resistant act of man when, at the winter ingress, the curfew is sounded throughout Nature. It indicates a spontaneous, Promethean rebelliousness against the fiat that this recurrent reason shall bring foul times, cold darkness, misery and death.

Black chaos comes, and the fettered gods of the earth say, Let there be light.

13. *Ibid.*, p. 32.

14. *Ibid.*, p. 62.

Her extraordinary fixity, her conspicuous loneliness, her heedlessness of night, betokened among other things an utter absence of fear. A tract of country unaltered from that sinister condition which made Caesar anxious every year to get clear of its glooms before the autumnal equinox, a kind of landscape and weather which leads travellers from the South to describe our island as Homer's Cimmerian land, was not, on the face of it, friendly to women.

15. *Ibid.*, p. 81.

16. T. Hardy, *op. cit.*, p. 252.

Her affection for him was now the breath and life of Tess's being; it enveloped her as a photosphere, irradiated her into forgetfulness of her past sorrows, keeping back the gloomy spectres that would persist in their attempts to touch her — doubt, fear, moodiness, care, shame.

17. T. Hardy, *op. cit.*, p. 82.

Her prayer was always spontaneous, and often ran thus, 'O deliver my heart from this fearful gloom and loneliness: send me great love from somewhere, else I shall die.'

18. T. Hardy, *op. cit.*, pp. 491-2.

But he had a vague consciousness of one thing, though it was not clear to him till later; that his original Tess had spiritually ceased to recognize the body before him as hers — allowing to drift, like a corpse upon the current, into direction dissociated from its living will.

19. *Ibid.*, p. 101.

20. T. Hardy, *op. cit.*, p. 441.

21. T. Hardy, *The Mayor of Casterbridge* (London: Macmillan, 1961), p. 354.

22. T. Hardy: *op. cit.*, p. 110.

23. *Ibid.*, p. 117.

She might have seen that what had bowed her so profoundly — the thought of the world's concern at her situation — was founded on an illusion. She was not an existence, an experience, a passion, a structure of sensations,

to anybody but herself. To all humankind besides Tess was only a passing thought.

24. *Ibid.*, p. 156.

‘I don’t know about ghosts,’ she was saying; ‘but I do know that our souls can be made to go outside our bodies when we are alive.’

25. T. Hardy, *op. cit.*, p. 218.

26. *Ibid.*, p. 342.

Thus she assured him, and arranged their plans for reunion; and at length each went home. Then Henchard shaved for the first time during many days, and put on clean linen, and combed his hair; and was as a man resuscitate thenceforward.

27. T. Hardy, *Far From the Maddening Crowd* (London: Macmillan, 1924), p. 388.

28. *Ibid.*, p. 462.

So together they went and read the tomb. ‘Eight months ago!’ Gabriel murmured when he saw the date. ‘It seems like yesterday to me.’

‘And to me as if it were years ago—long years, and I had been dead between; And now I am going home, Mr. Oak.’

29. T. Hardy, *The Well Beloved* (London: Macmillan, 1924), p. 324.

30. T. Hardy, *Late Lyrics and Earlier* (London: Macmillan, 1928), p. viii.

And what is to-day, in allusions to the present author’s pages, alleged to be “pessimism” is, in truth, only such “questionings” in the exploration of reality, and is the first step towards the soul’s betterment, and the body’s also.

If I may be forgiven for quoting my own old words, let me repeat what I printed in this relation, more than twenty years ago, and wrote much earlier, in a poem entitled “In Tonebris”:

If way to the Better there be, it exacts a full look at the Worst: that is to say, by the exploration of reality and its frank recognition stage by stage along the survey, with an eye to the best consummation possible: briefly, evolutionary meliorism.

31. T. Hardy, *op. cit.*, p. 364.

32. T. Hardy, *op. cit.*, pp. 438–9.

... The beauty or ugliness of a character lay not only in its achievements, but its aims and impulses; ...

33. *Ibid.*, pp. 439-40.

34. T. Hardy, *op. cit.*, p. 42.

35. T. Hardy, *op. cit.*, p. 507.

‘Why should we put an end to all that’s sweet and lovely!’ she deprecating. ‘What must come will come.’

36. *Ibid.*, p. 517.

‘Justice’ was done, and the President of the Immortals, in Aeschylean phrase, had ended his sport with Tess.

37. T. Hardy, *op. cit.*, p. 369.

Yet, instead of blaming herself for the issue she laid the fault upon the shoulders of some indistinct, colossal Prince of the World, who had framed her situation and ruled her lot.

38. T. Hardy, *op. cit.*, p. 512.

39. *Ibid.*, p. 516.